● ビブリオテーカ ●

BIBLIOTHECA

Nihon University Mishima Campus

日本大学国際関係学部・短期大学部（三島校舎）

No.13
2017.10

ケンブリッジ大学のたたずまい ― 学問の歴史と伝統

国際関係学部 国際教養学科
教授　高橋 章

中世のたたずまい ― ケンブリッジを一言で表現しようと思えばこの言葉しかあるまい。「学問の都」といわれるケンブリッジには大学の学部施設（DepartmentやFaculty）に加えて、現在31のコレッジ（イギリスでは正式にCollegeをコレッジと発音）やホールと呼ばれる学寮が町中に点在している。13世紀の初め、大学と市民の対立からオックスフォード大学から逃れてきた学者たちが移住し、この町にケンブリッジ大学を創設したと言われている。

これら二つの大学はオックスブリッジという総称で呼ばれており、文系のオックスフォードおよび理系のケンブリッジと賞され、特にルネッサンス以降は数多くの著名な学者を輩出、現在大学別ノーベル賞受賞者の数はケンブリッジ大学が世界第3位、オックスフォード大学が第7位を誇っている。中世以来の伝統をもつこの二つの大学は、イギリスの近代化以前に設立されており、まさしくこの国の近代化を含めたあらゆる面でのイギリスの発展の基礎づくりを成し遂げたといえよう。オックスブリッジの教育の特徴は、チュートリアル教育とよく呼ばれている。それは、学部レベルで行われている個別指導の教育である。学生はいずれかのコレッジに所属することとなりそのコレッジ内の寮で生活する。そして、そのコレッジに所属する教員の研究室に通って、個別指導を受けるのである。2、3人の学生に1人の教員で一週間に1回1時間行われる。学生は、与えられた課題論文を読み、エッセイを書き、そのエッセイにもとづいて教員との間で質疑や議論が行われる。このような教育を通じて「批判的な思考」が形成されていくと考えられている。このことが繰り返され、最後の学年末試験が課せられている。このような個別指導ができるのは、「コレッジ（学寮）制」をとっていることに由来しており、日本や米国における学部の概念とは明らかに異なっている。

ケンブリッジへは、ロンドンのキングスクロス駅から電車に乗り、美しい牧草地帯を走り抜けて、約1時間で到着する。イギリスの都市と都市の間に拡がる田園風景の景観は美しい。イギリス鉄道の歴史も産業革命以来独特の発展を遂げており、日本の新幹線のような弾丸列車を敷設することは考えていないようである。便利さと速さを追求すればそうなるが、高速の急行列車で十分のようである。

話は少しそれるが、ケンブリッジ大学出身の詩人ウィリアム・ワーズワースは湖水地方の出身である。私は、イギリスに行くと湖水地方を訪ねる。それは、40年来の友人であるビル・ウィリアムソン氏を訪ねるためである。ロンドンからスコットランド国境近くの町、カーライルまでおよそ4時間の旅である。興味深いことに、鉄道運賃は、週末とウィークデイによってその値段に違いがあるということで、この辺には、イギリス人の合理性を感じる。イギリスは、日本と比較してもその領土面積は小さく、イングランド北部の湖水地方の山岳地帯（日本人の感覚では丘陵地帯にしか見えないが）を除いては、そのほとんどが平地であり日本に比べれば土地の有効活用は容易であるように思われる。

カーライルからは湖水地方に住むビル・ウィリアムソン氏が車で迎えに来てくださる。彼は90歳を超えているが、日本初の原子力発電を行う拠点となった東海村にイギリスから技術指導にきたエンジニア外交官であった。湖水地方南部のウィンダミアにある彼のフラット（家）での語らいは楽しいひと時である。応接間に座ってイギリスと日本の政治、経済、エネルギー問題（特に彼の専門とする原子力）、文化等話題は幅広い範囲に及ぶ。彼に、ロンドンのジャパン・ソサエティの活動や日英文化交流に関する文献を紹介していただいた。アッという間に3、4時間が経過している。ある夏、ワーズワースを巡る湖水地方の名所を彼に案内していただいた。まさしく私はワーズワースが、描いた詩の世界『序曲』の詩を学んだことを思い出していた。美しい湖水地方と自然を目の当たりにして、彼が生み出した詩の背景をよりよく理解することができた。

話をケンブリッジに戻そう。ケンブリッジ大学は、最初に修道院、後に修道会によって建てられた種々の学校から発展した。1318年に

教皇ヨハネス22世によって「大学」の認可を受ける。学寮制度をもつケンブリッジ大学では、1284年に設立されたピーター・ハウスが現存する最古の学寮である。1502年には神学の教授職が初めて設けられ、1511年には、オランダから神学者エラスムスが招聘されて、ルネッサンス研究の基礎が築かれた。1546年には、ヘンリー８世が、ケンブリッジ最大のトリニティ・コレッジを設立した。1600年に於いては、キングズ・コレッジ（1441年創立）、セント・ジョンズ・コレッジ（1511年創立）を含む16の学寮を擁していた。

ペンブルック・コレッジはケンブリッジ大学のコレッジの中で３番目に古い歴史がある。ペンブルック伯エイマー・ド・ヴァランスの夫人でフランス貴族シャティヨン家出身のマリー・ド・サン・ポルが夫の死後、国王エドワード３世の許しを得て1347年に設立したマリー・ヴァランス・ホールがその前身であり、その後、ペンブルック・ホールと名称を変更し1856年から今日のペンブルック・コレッジとなった。

さて、日本大学はこのペンブルック・コレッジと30年以上提携関係にあり、毎年、大学本部主催のペンブルック・カレッジ・サマースクールが実施されている。ペンブルック・コレッジのキャンパス内には、創立650周年を記念して日本大学との共同出資により建てられたファウンドレス・コートと呼ばれる学生寮があり、日本大学全学部から選抜された学部生と大学院生はそこに滞在しながら研修をしている。手入れの行き届いた美しい緑の芝生の箱庭のような庭園に配された寮、食堂、チャペル、時を知るのは図書館の時計台からの鐘の音、イギリスの伝統をその肌身で感じることのできるケンブリッジでの１カ月の体験は、学生にとって貴重な機会となっている。私が引率教員としてこのサマースクールに同行していたある夏、夕方からジーザス・コレッジの中庭でロイヤル劇団演じるシェークスピアの『真夏の夜の夢』の上演を楽しんだ。さすがイギリス本場での演劇鑑賞は迫力満点で感動的である。劇作家としてのシェークスピアは、その作品の題材を古くギリシャ・ローマの古典の時代までさかのぼって考えていた国際人であった。そういえば、ペンブルック・コレッジの図書館にはシェークスピアの研究書が数多く所蔵されている。

▲ ペンブルック・コレッジのファウンドレス・コート

1877年に竣工したペンブルック・コレッジの現図書館は、ビクトリアン・ネオ・ゴシック様式のレンガづくりの伝統を感じさせるたたずまいである。建物の前には、ペンブルック・コレッジ出身の政治家ウィリアム・ピットの銅像を見ることができる。2001年に増築された図書館東側の３階部分の部屋は本学の学祖山田顕義にちなんで山田ルームと名づけられ、ゼミナール等の学習室として使用されている。図書館の１・２階は、開架式の閲覧室となっていて、人文科学や社会科学の本が中心である。哲学はギリシャ哲学関係の書物が多く、ローマに関する著作物は比較的少ない。シェークスピアに関する研究書は、さすがイギリスが本場であるだけに、その数は飛び抜けていた。私の研究するキリスト教関係の書物としては、イギリス国教会（聖公会）関連のものが数多くみられた。ヨーロッパのキリスト教を研究するには、ローマ・カトリック関連の研究であればイタリアのバチカン図書館、イギリス国教会（聖公会）・ピューリタン関係はオックスフォード大学およびケンブリッジ大学に数多くの文献があり、その他のジョン・ウェスレイのメソジスト教派の研究は、各教派の関連する図書館又は研究所において資料収集することになる。

▲ ペンブルック・コレッジの図書館。左端の建物３階が山田ルーム

なお、ペンブルック図書館の先には、17世紀の著名な建築家クリストファー・レンの設計によるチャペルがあり、キングズ・コレッジのチャペルと比べるとその規模は小さくコンパクトであるもののシンプルさの中に荘厳な雰囲気を漂わせている。

ケンブリッジ大学の各コレッジの図書館とは別に、ケンブリッジ大学としての総合図書館がある。各コレッジの図書館と比べてその規模は桁違いに大きい。総合図書館は、数々の歴史的文献を保存しているが、ティンダルがラテン語から英語に翻訳した聖書の原本などその他の数多くの貴重な本が保存されているのを見て、私は感服した。中世以来の知識の蓄積を営々と続ける図書館、ケンブリッジ大学の伝統的な学究体制の素晴らしさはさすがである。図書館の２階ないし３階の階段部分にも本がぎっしりと置かれていた。

▲ ケンブリッジ大学の中央図書館

ケンブリッジ大学を訪ねる人々には、各キャンパスの徒歩ツアーに参加することをお勧めしたい。少し歩き疲れたら、地元の人々に愛されているキングズ・コレッジの通りの前にあるカフェ「エンティー」（おばさんの意味）でアフタヌーンティーを飲み、そして、ジャムとクリーム付きのスコーンを食べる。その味は格別である。ショッピングは、立ち並ぶお店を利用してもよいが、キングズ・コレッジの前の広場では、テントが張られたバザールのお店があり、安く買い物を楽しむことができる。また夕方近くになると数多くのイギリス人がパブにやってくる。ケンブリッジでは「イーグル」という有名なパブがある。カウンターで黒ビール等好みのビールを注文してテーブルに座わり、ビールを飲みながら世間の様々な話題で歓談する。見知らぬ人とでも気軽に話ができる場所がパブ、すなわちその語源ともなっているパブリックハウスであり、その地域共同体の人々の語らいの場になっている。私もケンブリッジ大学の夏期研修の期間中、教員関係者とパブで語らいのときを持ち、友好を深めることができた。

研究の関係でたびたびケンブリッジを訪れているが、長い間ペンブルックの夏の研修プログラムを担当しておられたドーソン博士は私と同年配で、彼の専門分野である歴史学の観点から貴重な助言をいただいた。学寮長とは、イギリスのキリスト教の歴史や日英交流史などを巡って、さらにはイギリスの中東政策についての議論をさせていただいた。

歴史や伝統文化を理解するとは、なんと興味深いことか！このことを学生とともに分かちあえたら、私にとって大きな喜びである。

ESSAY

似て非なる集団主義国『タイランド』

国際総合政策学科　筧 正治

『タイ人と働く：ヒエラルキー的社会と気配りの世界』（ヘンリーホームズ、スチャーダー・タントンタウィー著、末廣昭訳、めこん、2000年）ではタイ人の世界観を３つの世界に分けて説明しています。その３つとは「家族の世界」、「気配りの世界」、「自分本位の世界」です。タイ人の世界観の中心は「家族の世界」です。世界では核家族化が進行中ですが３世代で住むなどタイ人の多くは大家族で住むことを好みます。また親戚同士は情報交換に余念がありません。

「家族の世界」の１つ外側のレイヤーは「気配りの世界」です。タイ人は友人や職場での人間関係に過敏なほど神経を払います。それはタイ文化が特権階級（ノーブル）と平民の間に横たわる葛藤への妥協の産物であったことに起因します。欧米と違いタイでは階層間で争うことをせず、また植民地にもならなかったため大きな社会変革を経ずに済みました。しかし特権階級（ノーブル）に生まれれば金持ちでいられる代わりに階層間の緊張を緩和する仕組みが必要になりました。そのためプンクンという独特の慣習が発展しました。ノーブルは平民に対し慈悲と思いやりを施し（メーターガルーナー）、平民はノーブルに感謝と恩義（ガタンコールークン）を示すという不文律です。このように縦横の葛藤を吸収する潤滑油のような役割がタイのノーブルには求められます。

しかし複雑な人間関係を形成する集団主義国家には誰も知り合いの見てないところでのストレスの発散といった「自分本位」の世界が存在します。タクシーが高速道路を爆走したり、運転手が釣銭をごまかしたりといった話がタイ旅行者の酒の肴にのぼります。しかしタイの「自分本位」の世界が大乗仏教の世界観のなかでどこかほほえましく抑制が効いたものであるのに対し、日本のそれは背筋が凍りつくようなものです。理由のない暴行や殺人などのニュースには枚挙にいとまがありません。ストレスの原因の多くは人間関係が上手くいかないことでしょう。日本では組織になじまない人には批判・非難・陰口・仲間外しが横行しますが、タイでは組織になじまない人の意見にも耳を傾け理解しようと努めます。弱者にも慈悲と思いやりを示します。行き場を失っても寺に駆け込めば受け入れてもらえます。精神的に病んでしまっても兄弟や親せきが見守ってくれます。それが大人の態度（メーターガルーナー）と見なされます。日本では少子高齢化と核家族化が進み独居老人たちが孤独死を遂げています。親戚同士でも助け合いを行わなくなりました。多くの犠牲を払い先進国になっても日本では荒涼とした荒野が拡がっています。心をどこかに置き忘れ経済成長にまい進してきた国家のなれの果てです。だからこそ今は人間関係先進国から学ぶ時期に来ているのではないでしょうか。タイから帰国した学生の瞳は、出ていくときのそれよりも輝いて見えます。その眼は「世界はまだ捨てたものではない」と訴えかけてくるようです。

ESSAY

図書館秘蔵の「伊豆の風景」活用を！

ビジネス教養学科　大久保 あかね

日本大学国際関係学部の図書館には、約2000点もの昭和30年代までの伊豆を記録した風景写真が保存されているのをご存知でしょうか。絵はがき製作者であり、写真家でもあった上田彦次郎氏の作品です。

12年前になりますが私の旅館研究者としての第一歩は、伊豆日日新聞でのコラム掲載から始まりました。「旅館の百年物語」と題し、歴史のある旅館の創業エピソードを写真とともに紹介していたのですが、ある日上田と名乗る方から電話をいただきました。

「使われている写真を撮影したのは、自分の父親にちがいない。自宅には旅館の古い写真が膨大にあるから、一度見に来ないか」というお誘いでした。それが上田彦次郎氏のご子息、英夫さんとの出会いです。

伊豆に限らず旅館は歴史が深ければ深いほど、地震や洪水、火事や空襲などを経験し、写真や宿泊台帳など重要な記録が残っていないのです。それまでも研究資料の収集には苦労していましたので、渡りに船と、すぐに訪問しました。

ところが上田家にあったのは、物置に積み上げられた段ボールに無造作に詰め込まれたハガキ大のガラス乾板の山でした。

昭和30年代まで主に業務用に使われていた暗箱式カメラでは感光乳剤が塗られたガラス板に感光させていることも、それを「ガラス乾板」と呼ぶことも、その時初めて知りました。

白黒が反転した画像を光にかざせば、なんとなく景色らしきものが認識できますが、残念ながらすぐに使える状態ではなく、少々落胆したのが正直なところです。

しかしながら、貴重な資料であることは明らかです。商品化された在庫の絵はがきには、往年の名旅館の新築落成写真や、ダンスホール、美しい庭園、あらゆる角度からの富士山など、研究者としてはまさに垂涎の資料です。

まずはガラス乾板を湿度管理のできる場所で保管し、一枚ずつ画像を確認して活用できるようにしたい、という上田さんの希望を聞き、なんとか力になりたいとも思いました。

フィルムメーカーに乾板の保管方法を問い合わせたところ、あまりの高額な費用に絶望したり、公的機関や、図書館で保管していただけないかと、上田さんと手を尽くしたりした結果、本学の図書館で保管し、さらに画像をデジタル化していただけることになりました。

その後の経過は、ホームページに詳しく記載されています。縁あって、この４月から、私も本学でお世話になることになりました。彦次郎氏の残した、貴重な資料をさらに活用したいと考えています。是非ご助言いただければ幸いです。

● FACULTY PUBLICATIONS

本学部教員の刊行物紹介

丹波・山国隊：時代祭「維新勤王隊」の由来となった草莽隊

淺川 道夫、前原 康貴 著［錦正社］

本書でとり上げた山国隊（やまぐに）とは、京都市の北側に位置する山国庄の郷士達が、慶応4（1868）年に結成した草莽隊（そうもう）である。山国隊は戊辰戦争に際して東征軍の一員となって征途に就き、数々の武勲を立てて凱旋した。今日では、鼓笛軍楽を演奏しながら京都三大祭のひとつである時代祭の先頭を行進する、維新勤王隊のモデルといった方がわかりやすいかも知れない。

書中では、山国隊が結成されてから戊辰戦争への参戦を経て京都に凱旋するまでの経緯と、明治28（1895）年に始まった時代祭を通じて山国隊（維新勤王隊）による新たな祭礼形式が京都市中に伝播するまでの流れを通史とし、山国隊の演奏する鼓笛軍楽や現存する装束や兵器類について、それぞれ各論としてまとめた。

山国隊に関する先行研究としては、明治39（1906）年に永井登が私家版で刊行した『丹波山国隊誌』を手始めに、水口民次郎『丹波山国隊史』（昭和41・1966年）や仲村研『山国隊』（昭和43・1968年）などいくつかの著書が出版されている。ここに本書の特徴を示すならば、軍事史の観点から山国隊の編制・兵式や戦闘戦史を詳述したこと、また山国での資料調査を通じて現存する文書や遺品を実査し、実証的に史実に迫っていることがあげられる。

共著者の前原康貴氏は、京都太秦の松竹撮影所に所属する映画人で、私が山田洋二監督作品『隠し剣　鬼の爪』の軍事考証を引き受けて以来の付き合いである。ちなみに来年の戊辰戦争150年に向け、二人で新たな共著『鳥羽・伏見の戦い』の出版を計画している。

북한 핵위기의 역사 : 북미 대립 25 년의 궤적（北朝鮮 核危機の歴史 ― 米朝対立25年の軌跡）

鄭 勛燮 著［지식공감］

北朝鮮の核問題に関する研究は韓国国内に溢れるほど多数存在する。しかし、その著作の多くは、ある特定の時期に焦点をあてて集中的に分析したものがほとんどであり、それらの研究を総合的にまとめようとする努力は比較的少ない。本書は、北朝鮮の核問題が本格的に浮上した1990年代初めから今日までのおよそ25年間の核危機の全容を、米朝対立の観点から総合的・実証的・理論的に考察したものである。本書は、ドラスティックに変動した北朝鮮核危機の歴史的変遷を考察するために、年代記的な叙述方法によりその軌跡をたどっている。

四半世紀に及ぶ北朝鮮核危機の中の米朝対立のプロセスを簡単に表現するならば、「交渉→合意→破棄→危機」の繰り返しであったと言える。また、北朝鮮は必要と判断されれば協議に臨むが、それとは別に、核開発は中断せず継続していくといった、核外交と核武装を徹底に区分・並行する二重戦略（two-track strategy）をとってきた。まさしく、「二歩前進」（核開発）のための「一歩後退」（米朝協議）」の戦術ともいえるものである。その間、北朝鮮は、「時間」という最も重要な資産を獲得したのである。本書では、こうした北朝鮮外交の「したたかさ」とともに、北朝鮮の瀬戸際戦術に翻弄されてきた米歴代政権の対北朝鮮外交上の「ふらつき」を指摘している。

北朝鮮の核問題および米朝関係にたずさわる後発研究者にとって、本書がいささかなりとも助けとなれれば幸いである。

グローバル社会のヒューマンコミュニケーション

西田 司、小川 直人、西田 順子 著［八朔社］

本書は、多文化共生の現代社会に生きる私たちに必須であるコミュニケーションの知識・能力・スキルについて、チャールズ・バーガー博士とウィリアム・グディカンスト博士の理論を用いて解説しています。相手の情報を得て不確実性を減少させること、そして初期の不安と不確実性をマインドフルの認知能力によって制御することが、効果的なコミュニケーションを可能にするのです。

本書のテーマはインターパーソナル・コミュニケーションですが、昨年この領域全体を網羅した書籍が国際コミュニケーション学会（ICA）とワイリー出版社の企画、前述のバーガー博士編集で刊行されました。Berger, C.R. & Roloff, M.E.（2016）. The International Encyclopedia of Interpersonal Communication. Vols. Ⅰ - Ⅲ. Wiley Blackwell.　213人の研究者による40数年に及ぶ研究の総括となっており、国際関係学部図書館蔵書です。この書籍に筆者もバーガー博士からの依頼を受け、25年以上に亘り共同研究してきたグディカンスト博士の理論に関して、その構築の歴史と理論の公理について論述致しました。グディカンスト博士が逝去して10余年が経ちましたが、バーガー博士がこの執筆機会を与えてくれたことに感謝しています。

本書を、上記掲載論文の日本語解説としても活用していただければ幸いです。最後に、論文執筆にあたり国際関係学部図書館による文献収集の多大なご協力に深く感謝致します。

デカルト医学論集

ルネ・デカルト著／山田弘明 ほか 訳・解説［法政大学出版局］
安西 なつめ 共訳

デカルトは1629－1641年の間に、ウシやヒツジ、魚、鳥などを解剖した。これまで、こうした解剖の経験が、『方法序説』や『情念論』といった著作の執筆に活かされたことは知られてきたが、彼が実際にどのように解剖を行っていたか、そしてそれが当時の医学においてどの程度正確なものであったかは十分に明らかにされてこなかった。本書はデカルトの医学関係のテキスト5篇を初訳し、詳細な解説を付すことで、彼の解剖の実際および医学の知識について明らかにした。

収録は『解剖学摘要』（安西なつめ・澤井直・坂井建雄 訳）、『治療法と薬の効能』（安西なつめ・澤井直・坂井建雄 訳）、『動物の発生についての最初の思索』（香川知晶・竹田扇 訳）、『味覚について』（香川知晶・竹田扇 訳）、『人体の記述』（山田弘明・竹田扇 訳）、および訳者による解説である。筆者は『解剖学摘要』と『治療法と薬の効能』の翻訳と解説を担当した。どちらも出版を目的とした著作ではないことから翻訳の難しさがあったが、誰かに見せることを想定していない文章の連続が、かえって、デカルト自身の目にうつされたものを鮮やかに浮かび上がらせるようだった。本書は、デカルトが目の前に置かれた解剖体に向き合い、具に観察を行うことで身体を理解し、自身の手によって得た医学的な知識と経験を理論化しようとしたまさにその過程の記録である。本書がデカルト研究の新たな材料となれば幸いである。

● 本学部教員の共著など一覧

書名	著者名等	出版社
道徳教育の理論と方法（Next 教科書シリーズ）	羽田積男，関川悦雄 編；**永塚 史孝** 分担執筆	弘文堂
英米文学に見る検閲と発禁	英米文化学会 編；**宗形 賢二** 分担執筆	彩流社
グローバル社会のヒューマンコミュニケーション	**西田 司**，**小川 直人**，西田順子 著	八朔社
中国，ベトナム進出日系企業における異文化間コミュニケーション考察	西田ひろ子 編著；**小川 直人** 分担執筆	風間書房
人間ドック健診専門医試験問題集 2015年改訂版	人間ドック健診専門医制度委員会問題集作成小委員会 編；**高橋 敦彦** 分担執筆	サイエンティスト社
クエスチョン・バンク管理栄養士国家試験問題解説	医療情報科学研究所 編；**高橋 敦彦** 分担執筆	メディックメディア
健診・人間ドックハンドブック　改訂6版	小川哲平，天野隆弘，北村聖 編；**高橋 敦彦** 分担執筆	中外医学社
臨床検査データブック2017-2018	黒川 清 他 編；**高橋 敦彦** 分担執筆	医学書院

※ゴシック太字は本学部教員

所蔵資料紹介

正岡子規関連作品

国際教養学科　小田切 文洋

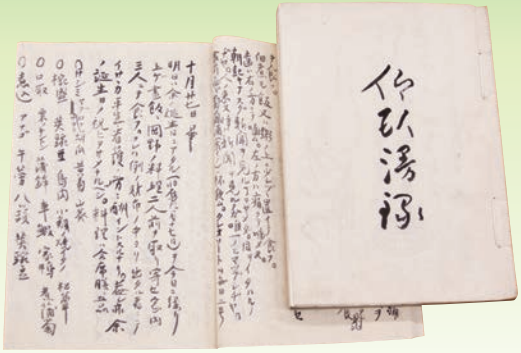
明治の一年前に生まれた正岡子規は、明治国家の成長とともに36年の短い生涯を駆け抜けるように生きました。俳句・短歌・写生文の分野で新しい文学を生み出そうと格闘し、数多くの作品を残しました。その正岡子規の生誕150年目に当る本年は、神奈川近代文学館で特別展「生誕150年正岡子規展―病牀六尺の宇宙」(3月～5月）が開催されるなど、子規の残した遺産を再認識する年になっています。出版物についても、4月に復本一郎『正岡子規人生のことば』(岩波書店）や森まゆみ『子規の音』(新潮社）など興味深い意欲作が発表されています。

国際関係学部の図書館でも、所蔵書の中から貴重なものを選び、「正岡子規生誕150周年記念ミニ展示」(10月26日まで）を開催することになりました。誌面上、展示品の中から4、5冊に絞って紹介します。

『獺祭書屋俳句帖抄 上巻』(東京俳書堂・大阪金尾文淵堂、1905（明治38）年4月）は、子規の唯一の自選句集で、明治25年から明治29年までの746句を年代別に収録しています。初版は明治35年4月で本図書館所蔵のものは再版。死の5ヶ月前に出版されたため、下巻は未刊に終わりました。長文の自序に、子規は「病床の慰みの爲に自分一個の爲に多くとも十數の俳友に見せる位な心持で選らんでをる」と、記しています。獺祭書屋は、自分の部屋が本や反故で埋まっているのを、獺が捕った魚を巣に並べておくのに見たてて子規自らが称した号です。俳書堂は、子規門下の高濱虚子が明治34年に起こした俳書出版書肆です。金尾種次郎の経営した金尾文淵堂は、装丁を凝らした文芸書の出版で有名です。

子規の『俳人蕪村』は、ほとゝぎす發行所から、1899（明治32）年12月に刊行された俳諧叢書の第二編です。高濱虚子の「序」は、「本編は獺祭書屋主人が蕪村に關する多年研鑽の結果を公にし嘗て新聞日本に連載したる者此篇出てゝ蕪村の名忽ち九鼎大呂より重し」と、本書を評しています。子規の写生説に基づき絵画的という面から蕪村を論じたもので、蕪村再評価の道を開いた一書。俳諧叢書は、俳句実作の視点から俳諧を見直した子規の俳論『俳諧大要』から刊行が始まっていますが、同叢書刊行の意図について、子規は「一　俳書叢書は毎月一册を發行し一年十二册を以て完結す　一　俳書叢書は俳諧に關する同人の著作を刊行す　一　俳諧叢書は時に有用と認むる古俳書翻刻す」と、記しています。

正岡子規の俳論の一つ『行脚俳人芭蕉』の自筆原稿の木版印刷による精巧な複製が、金尾文淵堂から1906（明治39）年6月に刊行されています。原稿の内容は、『鹿島紀行』や『奥の細道』などを取り上げながら、芭蕉の俳諧の旅を論じたものですが、子規の遺墨を彷彿させるものとして貴重です。本図書館は子規の遺墨の複製本として、岩波書店から、1918（大正7）年に刊行された『仰臥漫録』も所蔵しています。子規の自筆本の木版印刷による複製本で、病床でのスケッチも納められています（彩色したスケッチは、現在角川文庫本などに写真版が納められています）。『仰臥漫録』は、明治34年9月2日から10月29日までと明治35年3・6・7月の断片的な闘病日記です。人に見せるために書かれたのではありませんので、子規の肉声が生々しく伝わってきます。



▲寝返りもできず狭い病床でしか生きられなかった子規。『仰臥漫録』には、異常なまでの食欲が日々綴られている。

この他、正岡子規が関わった貴重資料を紹介します。子規の唱えた写生文は西洋絵画のスケッチの概念を文章に応用したものですが、新しい日本語散文の創出に大きな役割を果たしました。子規が高濱清（虚子）と編集した『寸紅集』は、ほとゝぎす發行所から、1900（明治33）年12月に刊行された写生文の選集です。「ホトトギス二卷二號より三卷十二號に歪る紙上題を課して募集したる短文凡て二十三題、今輯めて寸紅集と題す」と、目次冒頭にあり、二十三題は「雲・山・夢・灯・戀・蝶・赤・酒・旅・庭・墓・星・病・犬・畫・海・鳥・食・狂・風・車・祭・神」になります。

『春夏秋冬　春之部・夏之部・秋之部・冬之部』(俳諧叢書第七～十編)は、ほとゝぎす發行所から、「春」1901（明治34)年5月・「夏」1902（明治35）年5月・「秋」1902（明治35）年9月・「冬」1903（明治36）年2月がそれぞれ刊行されました。『春之部』は、正岡子規の選で、子規の「序」には、「春夏秋冬は最近三四年の俳句界を代表したる俳句集となさんと思へり」とあります。『夏之部』以下は、「本篇も夏之部と同く獺祭書屋主人に代り余等兩人之を選抜す。草稿とする所は日本新聞及ホトゝギスの俳句切抜帳たり」と、『秋之部』「序」にある通り、河東碧梧桐と高濱虚子とが編集に当たったものです。子規派の俳句選集として重要な選集です。

本図書館は、夏目漱石『我が輩は猫である』が連載された俳句雑誌『ホトトギス』も所蔵しています。松山で創刊されたこの雑誌は、1902（明治35）年から東京に発行所を移し、高濱虚子の手で発行されます。近代俳句の歴史とともに歩んだ雑誌です。

▲芭蕉に匹敵する俳人として蕪村を論じたもので、蕪村俳句の評価を決定づけた重要な著作である。

▲「俳句は文学の一部なり」と宣言した、子規俳論を代表する一冊で、俳句にかける子規の熱い思いが伝わる。

▲芭蕉の旅の人生を年代順に辿りながら、名句も交えて詳述したもので、結びには「吾れ二千餘年間見わたして詩人の資格を備ふること芭蕉が如きを見ず」とある。

推薦図書紹介 ● RECOMMENDED BOOKS

歴史の進歩とはなにか

市井 三郎 著［岩波書店］

国際総合政策学科　佐藤 量介

私たち人類は、どのように「進歩」してきたのか？ この先に期待される「進歩」とは何か？ そして、そもそも「進歩」とは、私たち人類にとって望ましいものなのか？ あなたなら、こうした問いにどのように答えるだろうか。もしかしたら、これからも「進歩」し続けることは自明であり、また、「進歩」が万人にとって善であることなど、今まで疑ったことなどない、というところかもしれない。ただ、少し思いを馳せれば、容易にはそう回答できないということに気付くはずである。たとえば、二度の世界大戦と核戦争の恐怖を経験しながらも、我々は戦争というものを根絶するに至っていない。先進国では医療技術が高度に発達し、また天候に左右され難い食糧生産技術の発展などにもかかわらず、その恩恵はアフリカの最貧地域には届かず、飢えによって命を落とす幼子は依然として数多くいる。ここ数十年、世界では貧富の差は縮まるどころか、拡大の一途を遂げている。こうした事例をいくつか挙げるだけでも、我々は「進歩」してきたし、これからも、同じ方向に「進歩」すべきだと断言できなくなるのではないだろうか。「進歩」とは人類にとって何を意味するのか。このままの「進歩」に問題はないのだろうか。疑いもしなかったこの「進歩」なるものについて、改めて考え直す機会を与えてくれるのが、市井三郎著『歴史の進歩とはなにか』である。

市井は、近代政治思想の分析から、その特徴としての「進歩史観」を抽出・比較検討しつつ、我々人類がはまり込んだ様々な隘路（パラドックス）を指摘する。その上で、そのパラドックスを乗り越えるための視座の転換を提示する。紙幅は決して多くはないが、読み応え・考え応えのあるものである。また、1971年に書かれたものではあるが、（それは我々がこの間「進歩」していないことの皮肉な証明かもしれないが、）決して古さを感じない。

自明視していたこと、もしくは自分が拠って立つ土台が、揺さぶられ、または取り崩される経験を経て、自己の認識・価値観・思考力は鍛え直され、自分なりの座標軸を確立していく。大学時代に必要なこうした経験を、本書を通じて是非得ていただきたい。

構造的暴力と平和

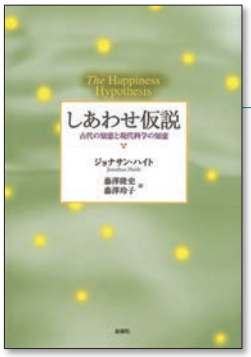
ヨハン・ガルトゥング 著 ／ 高柳 先男、塩谷 保、酒井 由美子訳［中央大学出版部］

国際総合政策学科　眞嶋 麻子

平和研究に関心のある人なら、一度は「ガルトゥング」という名前や「構造的暴力」という言葉を聞いたことがあるだろう。そのぐらい、ここで紹介するにはあまりに「古く」、名の知れている書籍である。にもかかわらず、いまなお本書から学ぶことは多い。

平和学の創始者の一人として知られているヨハン・ガルトゥングの貢献は、なんといっても、構造的暴力という概念を生み出したことであろう。平和とは、戦争がない状態だけではなく、国際および国内の社会構造に埋め込まれた貧困、飢餓、抑圧、疎外、差別がない状態をも指すとして、このような構造的暴力が除去されて初めて積極的平和が達成されるとした。

この理論モデルが初めて提示されたのは、ガルトゥングの1969年および1971年の論文である。それから半世紀近くが経とうとしているにもかかわらず、本書は現代世界を理解するための示唆に富む。一つは、「平和」という単純に思われる価値についてさえも所与の前提を疑ってみることで、現代世界が抱える問題を明るみに出せるということである。二つには、「社会構造に起因する問題」という視角によって、特定の誰かに責任の所在があるとは言い切れないけれど、確かに存在する問題の所在へと思考を広げることが可能になる。三つには、「我々」と「他者」との関係に対する説明の方法としての役割である。国際協力やフェアトレード、ボランティアなどに関心を持ち、遠くで困っている他者の問題を放っておけないと考える若者・学生がたくさんいる。その、「自分も何か役立ちたい」という気持ちを継続させるには、私たちが生きている世界を鋭く分析し続けることが必要であるが、「構造的暴力」に着目して問題を理解することは、間違いなく世界の見方を広げてくれる。一度読めば容易に理解できる…という本ではないが、ぜひ格闘してみてほしい。



しあわせ仮説：古代の知恵と現代科学の知恵

ジョナサン・ハイト 著 ／ 藤澤 隆史・藤澤 玲子訳［新曜社］

国際教養学科　伊坂 裕子

皆さんは、「日本国旗（日の丸）で風呂掃除」をしますか？　多くの人が「それは、ちょっと…」とこの行動に不快感を覚え、この行動は「道徳的」ではないと感じると思います。でも、「どうして」と理由を問われると答えに詰まります。この本の著者、ジョナサン・ハイトは、私たちの道徳的判断は、論理的な思考の結果というより、直観によるものであると主張して、注目を集めた社会心理学者です。

彼は、人間のこころを象と象使いに例えます。人間のこころには、意識し制御できるシステムと、意識しない自動化されたシステムがあることは、多くの研究で示されてきました。制御システムは象使い、自動化されたシステムは象です。象は、即時的な快楽を追い求め、好き―嫌いの判断基準に従って行動します。象使いは、未来を見通し、他の象使いと話をしたり、地図を読んだりして情報を入手し、象がよりよい選択をするのを助けるために背中に乗っています。でも、象の意思に反する命令をすることはできません。日の丸で風呂掃除をする例は、象が「嫌」なのです。

私たちは、皆、しあわせを求めています。大衆心理学や自己啓発本も、しあわせになる方法を示しています。しかし、著者のハイトは、これらの方法で象使いが洞察を得ても、一時的に象はそれに従ったとしても、すぐに元に戻ってしまうと主張します。象と象使いが協力して、しあわせになるためには、どうしたらよいのでしょうか？

この本は「しあわせ」をキーワードに古代の思想と現代心理学のさまざまな研究成果を引用しながら、象の癖や、象と象使いの関係性、象の飼い慣らし方をまとめたものです。専門的な研究成果を引用していますが、わかりやすくまとめています。最近の研究から、日本人とアメリカ人のこころは、少し違うことがわかっています。アメリカ人であるハイトが主張するしあわせ仮説が日本人にも適用できるでしょうか。その答えを決めるのは、皆さんかもしれません。

恋する文化人類学者 結婚を通して異文化を理解する

鈴木 裕之 著［世界思想社］

国際教養学科　伊藤 雅俊

本書は、鈴木裕之氏の「個人的体験をダシに使った文化人類学の入門書である」(p.6)。同氏はコートジボワールの旧首都アビジャンで文化人類学的フィールドワークを実施しているときに恋に落ちた女性ニャマ（アイドル歌手）と結婚、家庭を築き現在に至る。

文中には、文化人類学的フィールドワークの醍醐味といえる臨場感、具体性、即興性といった諸要素が散りばめられていて、異文化を体験的に学ぶことのおもしろさを存分に示してくれている。すさまじい説得力。すでにそのおもしろさ、生きた学びを体験的に知っている同業者が読めば、フィールドで感じたワクワク感(長いフィールド生活では嫌悪感やストレスが生じることもある)が蘇ってくることだろう。また、人類学を学ぶ上で欠かせない／親族や儀礼の人類学的研究には欠かせない用語・概念である花嫁代償、通過儀礼、冗談関係、忌避関係などの説明に「個人的体験をダシに使った」からこそ、とにかくおもしろい。

私が本書を手に取ったのは、私も「人類学する」者のうちの一人であるという理由からだけではない。私も鈴木氏と同じように、フィールドで出会った女性と恋に落ち、結婚したからだ。日々本当の意味での異文化体験をしている。互いに互いの違いを確認し合っている。互いに譲り合おう、互いに認め合おうと努力している。日常的に異文化理解を試みている。

文化人類学は異文化理解のための学問である。是非、若いうちに一度は文化人類学という「メガネ」をかけてもらいたい。「人類学する」人が増えればこの世界はもっともっと良くなると思う。文化人類学に興味のある人はもちろん、国際協力や国際開発に興味のある人、海外で就職を考えている人、国際結婚を考えている人、海外旅行が好きな人等々に本書をお勧めしたい。

ベトナム戦記

開高 健 著 ／ 秋元 啓一 写真［朝日文庫］

食物栄養学科　髙橋 敦彦

『ベトナム戦記』は、1964年末から65年初頭にかけて開高健と秋元啓一（カメラマン）が北爆前の南ベトナムを独自取材したルポルタージュである。開高は、1958年の『裸の王様』で芥川賞を受賞している。有名作家として、日本で安穏と過ごせたであろうに、従軍記者として紛争下のベトナムへ。命を賭して自らの足で歩きまわり、自ら見聞きした情報を取捨選択して「ベトナム戦争とは何なのか」という命題の答えを求めている。それは単なる好奇心がなせる業か？何かに絶望して死に場所を求めたのであろうか？

前半部分は当時のベトナムの文化、風俗、慣習が開高らしいユーモアで描写されていて興味深いが、ここには、大国の正義に飲み込まれて翻弄され、戦禍に巻き込まれていく小国の人たちの生の姿がある。

フエでは、トリ教授の車で遺跡見学もしている。教授夫妻とのゆったりとした夕食での高尚な文学話、照明弾に光る夜景と迫撃砲の爆音。どちらもありふれたベトナムの日常の対比が鮮烈である。道端に転がるベトコンの死体、僧侶の焼身自殺、繰り返されるデモ、クーデター、テロ、ベトコン青年の処刑。しかし戦争の国にいながら真の最前線にいない、傍観者、見物人の開高がいる。

後半、開高はいよいよ危険地帯に行く決意をする。ろくに読まずにサインしたMACV（Military Assistance Command, Viet Nam）の書類には「万一、負傷または死亡いたしましても、何の抗議もこれ致しませず候」とあり、「おどろいたがもうおそかった。」というのは本音だろう。開高はとある作戦に同行するが、ベトコンの奇襲、四方八方からの乱射を受ける。逃げまどう丸腰の開高の頭上数センチを銃弾がかすめる。開高のいた第一大隊200人のうち、生存者は17名であった。

巻末に開高は「とにかく私たちは見てきた。結論は読者におまかせします。」と結んでいる。近頃、世界中がとてもきな臭い。結論は急がねばなるまい。

夜行

森見 登美彦 著［小学館］

ビジネス教養学科　川戸 秀昭

文系の書物に囲まれて生活をしていると回りくどい表現や難解な長い文章を読むことに疲れ、ふと理系の作者が書いた小説を読みたくなることがある。小説でありながらもどこか数式が浮かんでくるような文章を読んでいると気分転換にもなり、集中力が増して読み進めるスピードも増していくのである。この小説『夜行』の作者である森見氏も京都大学農学部生物機能科学科応用生命科学コースを卒業、同大学院農学研究科修士課程修了という理系小説家である。2003年、在学中に執筆した『太陽の塔』で第15回日本ファンタジーノベル大賞を受賞し、小説家デビューする。その後、国会図書館職員との兼業を経て現在は専業の作家として活躍をしている。今回の小説の中身は非常に幻想的で、夢と現実の狭間にいるような感覚を与えながらも、方程式のようなしっかりとした流れがあるために読み返してみる必要が少ない。登場人物が多く、それぞれのエピソードが語られていく形式であり、ともすればそのつながりが解り難くなりがちである。しかしながらその難解さを微塵も感じさせず、スムーズにストーリーが展開されていくのは見事である。

パラレルワールドという言葉がある。今、我々が存在する世界と並行して別次元の世界が存在し、別次元に同じ人間がそれぞれ存在するというものである。その別世界について証明することは困難であるが、別世界とつながることのできる扉が実在するとも言われている。この小説はこのパラレルワールドを中心に展開される。そして、その別世界とつながることができるある絵画が存在する。そうした色彩的な美しさと異次元の世界とのつながりという神秘的な設定が上手くマッチしており、早く先が知りたいと思わせる内容になっている。実際、私も読み進めていくうちにあまりにペースが速くなり、読み終わるのがもったいないと感じるほどであった。一度、森見ワールドを味わうと心を奪われるかもしれない。

STUDENT'S VOICE

読書嫌いだった私

国際総合政策学科　4年　普久原 朝日

夏休みに入ってから気がつくと、毎日のように大学の図書館へ通っています。連日の猛暑の中じんわりと汗が服へとにじみ、セミの声がギーギーと鳴り響く木々の中を抜けるとたどり着く図書館は、大学生の私にとってのオアシスのような場所です。

この場を借りてカミングアウトをさせていただくと、私は大学に入るまでは学校や公共の図書館を利用したことがありませんでした。そもそも本を読むこと自体が苦手で、中学まで毎年課されていた夏休みの読書感想文など、最後まで書き上げたことすらありませんでした。しかし、今では250冊ほどの本がある下宿先の本棚から、読みたい本を3、4冊ほど取り出し、ショルダーバッグを担ぎ読書をする場所を求めて大学へ行くようになりました。

小中学生のころバスケットボールに熱中していた私は、高校に入ると写真活動をするようになります。高校には写真部がなかったため友人を誘い、同好会を立ち上げ3年次には写真部へと成長させることができました。写真活動では地域のいろんな大人たちと出会い写真を撮る中で、数多くの貴重な経験をしました。次第に写真コンテストでも賞をもらえるようになり、その実績で本学部のAO入試を受けることができ入学できました。高校までの詰め込み型の勉強が嫌いだった私は、大学での物事を深く考え探求していく学習スタイルにのめり込むようになります。

ジェンダー論で有名な小倉千加子さんは『結婚の条件』で、文系学部の教員の仕事とは、学生の経験で得た無意識に言葉を与え意識化し、意識の量を増やすことだと言います。すると読書も、自分の経験で得た無意識を意識化し言葉で説明するための手段の一つではないかと考えました。進学のため地元沖縄を離れ他の都道府県の人と関わっていく中で、沖縄の抱える問題や沖縄人としてのアイデンティティーを意識するようになりました。将来は、沖縄問題を言葉で伝えていき、沖縄のために活躍する人材になりたいと思います。

国際関係や沖縄関係を研究するためには専門書が欠かせません。例えば、『沖縄大百科事典』の3巻と別巻1冊を古本屋で揃えるにしても1万5千円くらいしますが、日本大学国際関係学部の図書館ではそれが全て揃っています。他にもたくさんの専門書や研究論文があり、世の中を理解するための手助けとなること間違いなしです。勉強に疲れてきたら息抜きとして映画を観たり、雑誌や新聞を読んだりすることだってできます。せっかく高い学費や時間をかけて大学に通うのですから、より学生生活を充実させるためにとことん図書館を活用してみてはいかがでしょうか。

国際機関資料室から　● INTERNATIONAL DOCUMENTATION CENTER

日・EUフレンドシップウィーク2017
「情報で見るEUのあれこれ」開催

EU情報センターを併設している国際機関資料室では、毎年5月9日のヨーロッパ・デーを記念して、日本とEUの交流を目的とするイベント「日・EUフレンドシップウィーク」を開催しています。

今年は、5月9日（火）～5月31日（水）まで、図書館1階閲覧室にて、「情報で見るEUのあれこれ」と題し、EUについての基本情報、ユーロコインやEUの公用語、ローマ条約締結60周年、英国がEUを離脱（BREXIT）する経緯等、さまざまな側面を紹介する展示を行いました。

また、昨年に引き続き、オーストリアやドイツなどのEU諸国へ留学した学部生4名による現地レポートも紹介しました。現地での生活の様子に加えて近隣のチェコやルクセンブルクの名所や食文化についてカラフルな写真と共に紹介され、充実した留学生活をうかがい知ることができました。

恒例のクイズでは、展示資料に関連した問題を出題し、正解者には駐日欧州連合代表部から提供されたボールペンやエコバッグ等のEUグッズを。また、「ローマ条約調印60周年記念」や「英国、なぜEUを離脱？」の記事を読んで感想を書いてくれた回答者には、EU特製Tシャツ、もしくは、EUのピンバッジを景品として差し上げました。

今回は、多岐にわたる内容となり、EUについて多角的・多面的に紹介できた良い展示会になったのではないかと思います。

図書館ニュース
BIBLIOTHECA
第13号
通巻第158号
発　行　日／2017年10月2日
編集・発行／日本大学国際関係学部
図書委員会
http://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/